

子どものアートの身体／思考を促す造形活動の考察

—BFAプロジェクトの実践を通じて—

宮川 紗織・郡司 明子・石原加奈子

梶原 千恵・狩野 未来

群馬大学教育実践研究 別刷

第37号 131～140頁 2020

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

子どものアートの身体／思考を促す造形活動の考察 —BFAプロジェクトの実践を通じて—

*宮川 紗織・*郡司 明子・**石原 加奈子
梶原 千恵・狩野 未来

*群馬大学教育学部

**群馬大学大学院

Consideration of the art activity promoting children's artistic body / mind —Through practice of BFA project—

*Saori MIYAKAWA, *Akiko GUNJI, **Kanako ISHIHARA
**Chie KAJIWARA, **Miku KANO

*Faculty of Education, Gunma University

**Joint Graduate School of Gunma University

キーワード：アート活動・幼児教育・地域貢献

Keywords : art activities, infant education, regional contribution

(2019年10月31日受理)

1. はじめに

本稿は、“BFAプロジェクト”と名付けた幼児のアート活動の実践を記録・分析し、子どものアートの身体／思考を促す造形活動に関して考察するものである。

本プロジェクトは、群馬県高崎市にある大森こども園にて実施している出張ワークショップ型アート活動である。平成29年度から子どもたちの生活、遊びをより豊かにする目的で実施してきた。群馬大学美術教育講座郡司研究室と筆者及び主に美術教育の大学院生・学部生がスタッフとして活動している。プロジェクト名である“BFA”とは、実践のフィールドとなる大森こども園にちなみ“Big Forest of Arts”の頭文字を取った略称である。この名称にはアートの活動や体験が浸透し、地域や社会を包括するアートの大きな森になる、という意味を込めている。

なお、準備過程と企画コンセプトに加え1年目の実践については、「こどもの生活をより豊かにするアート活動の考察—地域に向けたBFAプロジェクトはいかに始まったか—」（『群馬大学教育実践研究』35号）において報告した。また、2年目の展開と①【地域の「もの」が生きる—クリエイティブリユースの視点から—】②【子どもの「からだ」が生きる—多感覚性（身体性）を活性化する視点から—】③【親子の「つながり」が生きる—協同性を重視する視点から—】という3つの視点をそれぞれ抽出した6つの実践については、前稿「こどもの生活をより豊かにするアート活動の考察II—地域に向けたBFAプロジェクトはどのように展開しているか—」（『群馬大学教育実践研究』36号）において報告している。なお、本論文は各項目を末尾に記名の執筆者が執筆し、全体を宮川がまとめた。

2. BFAプロジェクトの変容

2-1. 運営委員会の変化

BFAプロジェクト運営委員会は、本プロジェクト起ち上げメンバーである郡司、宮川、石原の3名を中心に群馬大学美術教育講座の院生・学部生が担っている。院生や学部生(以下学生)は毎回多少メンバーの入れ替わりがあるが、主に幼児教育やワークショップの実践に興味を抱いている学生が任意で参加している。ここでは、3年間の変遷を、実践前・実践日・実践後の3点から述べていきたい。

【実践前に関して】本プロジェクトを起ち上げた当初から、実践前に「試しの活動」という実践的検討会を設けている。学生を交えて行っているこの会は、素材選びや環境構成等、実際に子どもたちと活動することを想定しながら、自身も子どもの立場及びスタッフの立場になりきりながら、題材研究を行う会となっている。昨年度までは1回の実践に対して1回、会を設けていたが、今年度からは2～3回試しの活動を行うことによって、複数の素材を比較しながら吟味することや1人でも多くの学生に参加してもらうことが可能となり、より充実した準備を行えるようにした。

【実践日に関して】初年度は2ヶ月に1度、年間で計6回の実践を行った。その月によって4歳児2クラス同時(40人程度)の後、5歳児2クラス同時(40人程度)の実践をしたり、4歳児5歳児同時(80人程度)の実践をしたりした。昨年度は月に1度、年間で計11回の実践をした。5歳児が連続で活動したり、1回の活動時間を短くして6人程度のグループに分けた活動をしたり、1日ばかりで4歳児5歳児共に1クラスずつ実践したりなど模索しながら実践を行ってきた。そして昨年度の11月の実践から、月毎に4歳児(2クラス)と5歳児(2クラス)の活動を交互に行うという形式に至った。1クラスずつ、20人程度の活動を1日に2回実践している。これは、できるだけ多くの子どもたちにアート活動を体験して欲しいという園からの要望と、少人数の活動でより丁寧に細やかな省察をしたいという運営側の思いを反映した結果である。

【実践後に関して】初年度から活動の記録としてカメラ・ビデオの他に、その場で活動の様子をイラスト等で記載するドキュメント・ウォールを作成してきた。学びの過程が可視化されたドキュメント・ウォールは、園の壁面に掲示してもらい、子どもたちや保育士

だけでなく、登園・降園時にも保護者の方々が目にするようにした。今年度からは活動終了後に報告書も作成し、確実に保護者の方に活動の様子が分かるよう、言葉と写真でまとめている。「保護者からも活動の様子がよくわかりました。」と保育者との間で話題が出るなど、好評のようである。また昨年度の課題である、実践そのものの意味や価値、子どもたちの発話や行為を省察する機会の乏しさを解決するために、ビデオカンファレンスの機会を設けた。活動の中心となるスタッフ4名(本稿執筆者ら)が、子どものアートの身体/思考に着目しながら、その場でどのような出来事が起きていたのかを分析した。



図1 今年度の5月のアート活動の報告書

2-2. 園におけるアート活動の位置付けの変化

初年度は園におけるアート活動の位置付けが未知の段階だったため、2ヶ月に1度様子を見ながら実践を行った。材料費等もBFAプロジェクト運営委員が各自出し合いながら活動していた。次年度からは園の方でも予算を組んでもらい、十分な材料を揃えることができ、実践回数も毎月1度と2倍に増え、親子ワークショップという新たな取り組みも行われた。今年度からは親子ワークショップが園での年間行事予定の一つとして位置づくようになり、園のパフレットにもアート活動が大きく取り上げられるなど、園の中でもアート活動が定着してきたことがうかがえる。また、アート活動で作った作品を展示したり、園行事の装飾の一部として使用したりする場面も見られるようになった。実践日以外に園を訪れた際も子どもたちが親しみ深く声をかけてくるようになった。これらの事から、保育者、子どもたちにとってもアート活動への期待は高く、アート活動が日常生活の一部に組み込まれつつあるように思える。(宮川)

3. 本プロジェクトにおけるアート活動の意義 —子どものアートの身体／思考に着目して—

3-1. 本プロジェクトの目的

本プロジェクトは、園の保育環境においてアートの活動が日常に根ざすことを通じて、園を取りまく地域のコミュニティが文化的教育的に豊かになることを目指している。

一般的な園の日常は、個々の子どもの思いやありようを大事にしつつも、集団としての規律や規範を重んじる場面も多く、本来どの子どもにも内在している根源的能動的な遊び／学びに向かう力が発揮できる時間や空間は限られている。保育者も小学校教育等、その先を見据えて、幼児期に身につけておきたい方向性を踏まえると、～べき、～ねばならないといった価値に縛られがちである。そのような状況に対して、大人も子どもも“創造のエネルギー”に身を委ね、本来の「生（いのち）」の充実＝ありのままのその人らしさを発揮して生き生きと生きる姿を呼び起こしてくれるのが、アート活動である。これまでの活動では、子どもが多様な素材（もの）に触れ、主体的＝からだまるごと対象（もの・こと・ひと・場所）に働きかけ、個々の子ども、さらには協同による子どもたち同士の探索活動が展開することを保障してきた。

3-2. アートの身体／思考とは

アート活動を通して子どもを「見る」際に我々が注目したのは、子どもが本来的に備えているアートの身体／思考のあり方である。まず、「アートの思考」とは佐伯胖の提唱する「絵的に考える」「なってみて考える」という想像的・創造的な思考である。絵的に全体を捉え、部分を構成する見方であり、自らモノを変形・操作して自分なりにものごとの意味を探究する思考と言える。¹⁾「なってみる」＝擬人的認識論とは、「対象自身に『入り込む』ことで、その対象の周辺状況を、対象自身にとっての意味として、自ら（その対象自身）がさまざまな関係のなかにあることを『身をもって実感する』」ことである。²⁾それは、「具体的なモノを介して、それとのやりとりにおいて捉えがたい自己の内的なイメージを明確化して表出する営みのただ中で、自己への省察も行われる。」³⁾として、芸術的な省察から美術教育の可能性を示す小松佳代子に

よるABR（Arts-Based Research）に接続する視点でもある。すなわち、アートの思考（芸術的省察）とは、「モノ」を介して対象／世界と対話し、そのモノを通じた意味の世界へと自らの経験をつなげることによって、モノが自分ごととしての「もの」に化すと同時に、対象との関係性において自身が更新されることを意味する。

そして、「アートの身体」とは、紛れもなくこの「アートの思考」が生成する「からだ（心身の意）」のことであり、「世界に対話的であり続けようとする志向／行為」と捉えることができよう。この点において造形活動とは、対象と身体とのコミュニケーション（対話：呼びかけ－応答）過程そのものであり、アートの身体／思考を際立たせるシステムとも言える。このように、我々は造形活動（ものとの対話）を通じて、子どもに既に内在しているアートの身体／思考＝感じて考え表現する子どものあり方を引き出し、その姿に学びたいと願い活動を継続している。

3-3. アート活動のその先に

アートの活動は、誰もが決まったゴール（価値）に向かうのではなく、自分自身のゴール（納得解）を見つけ出せる経験である。それは、外から与えられる枠組みの中で息苦しさを抱えながら身動きできずにいるのではなく、自分自身の枠組みを創造的に作り出して行く原動力になる。アートによる認識や思考の深まりが、結果として従来の規範意識や既存概念を見直し、再考する契機を与えてくれる。それは、やわらかく、しなやかな保育・教育のあり方につながるのではないか。

また、アートの教育は正解・不正解を超えて、自分なりにものごとの意味や価値を見出すためのエクササイズでもある。なかでも造形活動は、素材としての「モノ」から自分ごとの「もの」へ、その変化が実感を伴って可視化されることに特徴がある。自分の働きかけ次第で、目の前のものごとは変化していく。自分の働きかけ次第で世界をつくり出すことができる。それらが他者と共に具現化される、という体験の積み重ねは、自身への信頼感＝自己肯定感はもとより、他者と共に協同して新たな世界（場所、コミュニティ、社会）を創造することができる、という相互の充足感を高めることにも貢献できるのではないか。それは、まさに本プロジェクトが目指すアートを通じた文化的で教育的なコミュニティづくりにおける素地（耕し、種

まき)なのである。

(郡司) いては前稿に記載しているため省略し、昨年度の第7回から現在まで行ってきた実践の内容について簡単に紹介したい。さらに、今年度の実践の中から、アートの身体／思考に着目して特筆すべき3つの実践「ぶるぶるゼリー」「アイスペインティング」「くねくね粘土」における子どもの様子について詳しく紹介する。(宮川)

4. 実践の記録

4-1. 実践全体の記録

初年度の第1回から昨年度の第6回までの実践につ

表1 【平成30年度11月以降の活動】

活動の様子	題材名・実践日・対象	活動概要
	第7回「いろんな音を見つけよう」 2018. 11. 30(金) 5歳児	ダンボールを叩いたり、擦ったりしていろんな音を出した後、その音をダンボールにクレヨンで描く活動。
	第8回「ひかりのいろをつくろう」 2018. 12. 21(金) 4歳児	薄用紙にカラーセロファンを貼った紙で小型ライトを、包み、暗くした部屋で色や光の変化を鑑賞する活動。
	第9回「毛糸ぐるぐる、つながる木の枝」 2019. 1. 18(金) 5歳児	木の枝に色とりどりの毛糸を巻きつけたり、枝と枝を毛糸で繋げたりして自分だけの特別な枝をつくる活動。
	第10回「かいじゅうにだいへんしん！」 2019. 2. 8(金) 4歳児	新聞紙にカラーガムテープで色や模様をつけて身にまとい、かいじゅうになりきる活動。
	第11回「いろいろぺたぺたカード作り」 2019. 3. 8(金) 5歳児	2年間のアート活動で出会った素材の中から自由に選んだ素材を、ラミネートフィルムで挟み、オリジナルカードをつくる活動。

表2 【令和元年度10月時点での活動】

活動の様子	題材名・実践日・対象	活動概要
	第1回「ふわふわひらひら重なる色」 2019. 5. 17(金) 5歳児	お花紙と全身で関わった後、お花紙を貼ったり、重ねたりした透明シートの下に潜り、鑑賞する活動。
	第2回「ぶるぶるゼリー」 2019. 5. 31(金) 4歳児	色・固さの違う寒天の感触を味わった後、袋に詰め外の光に透かして鑑賞する活動。
	第3回「ぐにゃぐにゃいろあそび」 2019. 6. 21(金) 5歳児	プラバンの上に絵の具をのせ、それをクリアパックに閉じて袋の上から絵の具の感触や色が混ざる様子を味わう活動。
	第4回「アイスペインティング」 2019. 7. 19(金) 4歳児	障子紙に白のクレヨンで空を描いた後、水絵の具(絵の具を溶かした色水で作った水)で空を色づける活動。
	第5回「くねくね粘土」 2019. 9. 27(金) 5歳児	油粘土と全身で関わった後、粘土ひもをつないで、粘土の感触や形を見立てる面白さを味わう活動。

	<p>第6回「むすんでつないでBigfoerst!」 2019.10.25(金)4・5歳児親子</p>	<p>親子で毛糸をむすんだり、つないだりして、部屋全体を毛糸の蜘蛛の巣に変身させ、床に寝て下から鑑賞する活動。</p>
---	---	---

4-2. 実践1 「ぶるぶるゼリー」

表3 「ぶるぶるゼリー」における子どもの姿

主な活動	子どもの活動(行為・発話)
<ul style="list-style-type: none"> ・海の生物になりきる。 ・寒天と出会い、触る。 ・寒天を袋の中に詰めて陽の光にかざして鑑賞する。 ・袋に詰めた寒天に触る。 ・寒天が入った袋を持ち帰る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海の生物になりきっている。 ・A児は泣いており、保育者から離れられない。 ・寒天を優しく触った後、握ったりつぶしたりして、寒天の触り心地を思う存分味わう。 ・「冷たい!」「つるつるしているよ!」「きゃー」「やわらかい!」「きれい!」「こっちはちょっと固い」 ・5分程経過してようやくA児は手を伸ばし寒天に触れる。最初は片手だけだったが、両手でもむようにして寒天を細かくつぶし始める。 ・寒天を袋の中に集め、ぐにゅぐにゅもんだり踏んだり、太陽にかざしてみたりする。 ・A児は暖色の寒天を袋に集めると、保育者と一緒に外に出て陽の光にかざして寒天を見る。 ・「宝物みたい!」「足でも気持ちいんだよ!」「光に当てると色が変わった!」 ・A児は体育館に戻り夢中になって寒天が入った袋を押ししたり、揉んだりして感触を確かめる。 ・自分が集めた寒天の袋を大切に持ち帰る。

〈概要〉

日時：2019年5月31日(金)12:30-13:10、13:20-14:00

対象：4歳児 22名、24名 計36名(2クラス)

本活動は食紅で着色した寒天の色や独特の触り心地、固さの異なる寒天の触感の違いを味わい、光に透かすと変化する色を鑑賞する活動である。

4歳児にとって初めてのアート活動は海の生き物になりきることからはじまった。魚や蟹、蛸などの動きを真似して海(体育館)を泳いだり、サメになりきった大人から逃げたりした。その後、海の宝物のプレゼントとして色鮮やかな寒天を渡した。最初に指や手のひらで優しく触り、表面の感触を確かめると、力を込めて寒天の中に指を入れ始め、寒天の感触にのめり込んでいく。それから透明な袋に好きな色の寒天を集めて、太陽の光に透かして鑑賞した。

〈省察〉

A児は最初から保育者と離れがたく行動を共にしていた。保育者がA児に寄り添うことでなんとか活動に

参加している状態だった。寒天が目の前であっても、頑なに触ろうとしなかったが、周りの子どもたちが楽しそうに寒天に触る様子や「気持ちいいよ!」という声、保育者の「触ってごらん?」という声かけから少しずつ寒天や活動に対する興味が生まれ、手を伸ばす姿があった。そして、A児は袋に自ら赤や黄色、オレンジといった暖色系の寒天を集めて外で鑑賞し始めた。

次第にA児の涙は止まり、表情は柔らかく変化していった。最後は袋に詰めた寒天を夢中になって押しているA児の姿があった。A児は人見知りであり、初めての活動の際は慎重に様子うかがう状態だという。まずは活動に周辺的にでも参加して、その場に身を置いてみるものの価値は大きい。素材との出会い、周りの子どもたちとの関係性、自らの身体との響き合い、それを支える保育者の働きかけによって、その子なりに時間をかけながら、活動に馴染んでいく一連の過程が明らかになった。そのなかで、確実にアートの思考／身体(ふれる-みる)の芽生えが見られる。

(狩野・宮川)

4-3. 実践2 「アイスペインティング」

表4 「アイスペインティング」における子どもの姿

主な活動	子どもの活動(行為・発話)
<p>・絵本『あの雲なあに?』を聞く。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちは集中し、絵本の読み聞かせに聞き入っている。 ・ファシリテーターによる絵本の読み聞かせの間、C児は保育者の膝の上に座ったまま周りをきょろきょろ見渡している。(読み聞かせが終わって、空にあるものを描いてみよう伝える。) ・「えっ、なに?」「お空つくれるの?」「いえーい!」 ・数人の子どもたちが座っていた状態から中腰になり周りを見渡す。 ・「あの紙に描くの?」と指をさして聞く。
<p>・クレヨンで空にあるものを描く。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・6〜7人のグループに分かれ、障子紙に白のクレヨンで空を描き始める。 ・クレヨンで描いていく中でB児は「白くて、線がみえないよ」と言い途中手が止まってしまうが、「みてみて!ここからだみえるよ!」と机から少し離れた場所から光が反射して線が見えることに気づく。 ・C児、笑みを浮かべながら大きな円を何度も描く。円を描くごと段々と円が大きくなっていき、最終的に画面の3分の1が渦のようになる。 ・A児、虹のようなものを大きく描き始める。
<p>・氷絵の具で白い空に色づけをする。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・氷絵の具を手にとると、その冷たさに「つめたっ!」「想像以上に冷たい!」と声があがる。手の温度で氷が溶けだし画面に色が付いていく。 ・クレヨンで描いていた時には見えなかった白い線が鮮明に見える。 ・C児、左手に持った氷を小さな円を描くように画面に滑らせていく。 ・C児、新しい氷を両手に持ち大きな円を描き始めると、ひじや手の甲を画面にこすりつけ、自身も氷の一部になったような動きで描いていく。 ・A児、C児の様子を見て、また描き始める。 ・C児、色がついた手や腕を差し出し、保育者に見せる。

〈概要〉

日時：2019年7月19日(金) 9：40-10：10、10：20-10：50

対象：4歳児 22名、24名 計36名(2クラス)

本活動は障子紙に白のクレヨンで線を描いた上に、絵の具を溶かした氷でさらに描くことで、氷の冷たさやつるりとすべる感触を楽しみながら、浮かび上がる線と色の滲みや混ざり合いを味わう活動である。

『あの雲なあに?』の読み聞かせが終わると、障子紙に白い線画で各々思い浮かべる空を描いていく。そして氷絵の具の冷たさや感触を味わいながら、氷を画面に滑らせていく。手の温度で氷が溶けていき、色が紙に染み込むと白い線が浮かぶと同時に手にも色がつく。氷絵の具の個数が増える毎に子どもたちの動きも大きくなり、画面全体に様々な表情の空が広がった。

〈省察〉

外国と繋がりのあるC児は、日本に戻ってきた直後ということもあり、周囲とのコミュニケーションに言語的な課題がある様子であったが、白いクレヨンを持つと、腕を大きく動かして円を描いていった。また、氷が解ける瞬間を手の平だけでなく、腕や手の甲でも積極的に感じることを楽しんでいた。C児が活動に没頭すると、その行為に周囲の子どもたちも共鳴し、そのグループの画面は、手一腕一体全体による描画行為が相互に響き合い、様々な色が織りなす空の様子へと変容していった。アートの思考/身体を通じて、表現の場を共有することで、通常の言葉を越え、造形言語、身体言語を介するコミュニケーションが活性化していた。(石原・宮川)

4-4. 実践3 「くねくね粘土」

表5 「くねくね粘土」における子どもの姿

主な活動	子どもの活動(行為・発話)
<p>・粘土で自分の分身を作る。</p> 	<p>(制作終了予定時刻となったため、鑑賞することを伝える。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・粘土で自分の分身となる小人を作る。 ・「えー、まだ作りたい(王国を)」 ・「小人って何?」 ・「ぼくは星の形。」 ・作った分身を手を持ち、探検(鑑賞)する王国の前に全員が集まる。

- ・くねくね王国を探検(鑑賞)する。



- ・身体全体で鑑賞する。



- ・(自分の分身で道の上を歩いて探検することを伝える)
- ・D児「そんなんじゃない！そんなんじゃない！バイクとかでさ、レースする！」と大きな声でファシリテーターに訴える。
- ・「いくよー」「わー！！」「もう1回」
- ・粘土の上を子どもたちが一斉に駆け抜ける。
- ・もう1度全員ではじめの地点に戻り、粘土のレース場の上を走る。
- ・他の2つの王国の鑑賞にうつる。
- ・分身を使って粘土の道の上をたどったり、子ども自身の足で歩いたり、走ったり、身体全体を使ってそれぞれの王国を鑑賞する。
- ・「ここは湖だよ。」
- ・「これはジェットコースターの国。」

〈概要〉

日時：2019年9月27日(金)12：30-13：10、13：20-14：00

対象：5歳児 18名、18名 計36名(2クラス)

本活動は油粘土でひも作りをし、粘土ひもをつなげて自由に形を作る活動を通して、粘土の感触や形を見立てる面白さを味わう活動である。

活動は足の感覚をほぐす体操から始まった。手と足の握手、足のじゃんけん、足で「こんにちは」の挨拶などを行った。次に、粘土の塊を球体にする、子どもの胸の位置から落とす、足で踏むなどして粘土の感触を味わった。メインの活動は粘土でひも作りをし、つなげた粘土で自分の国を作った。6人1グループで活動し、3つの「くねくね王国」を作った。制作活動終了後の鑑賞の時間では粘土で自分の分身の小人を作り、くねくね王国の世界観を味わった。

〈省察〉

ファシリテーターはプラスチック段ボール板(縦180×横90cm)の上に粘土の造形物を作ることを想定していた。しかし活動初期からD児の粘土は板からはみ出し、他の子どもの粘土とつなぎ合わされ、他のグループの板まで伸びていった。D児は長くした粘土を視界におさめるため何度も離れて全体を見ている。自分の粘土と他のグループの粘土を比較しているようだ。こうした制作中の鑑賞は本園児としては珍しい。30分程度の活動を終え、鑑賞の時間になった。参加者はD児の作った粘土の周りに集まった。筆者が粘土の小人を使ってA児の粘土の上を歩こうとすると、D児は「そんなんじゃない！レースする！」(表5波線)と強く主張した。D児の作品がレース場をイメージさ

れていることが全員に共有された。そこでスピード感を意識して全員でD児の粘土の上を走った。身体全体で作品を鑑賞し、そのテーマ性を共に味わう時間となった。(梶原)

5. 実践を通じた考察

5-1. 子どもの姿

ここでは先述の3つの実践についてアートの身体／思考という観点から子どもの姿を考察していく。

「ぶるぶるゼリー」

A児にとって寒天は他者が持ち込んだモノでしかなく、手を伸ばして触れることに拒否反応を示す。しかし、信頼できる友達の様子や保育者の声かけとモノ(素材)そのものが持つ魅力に引き寄せられ片手を伸ばして触れてみる。ここでA児とモノとの対話が始まった。いつしか片手によるモノとの応答が両手になり、手だけでなく体全体がモノに近づいていく。袋に集める頃には、A児の働きかけによって細くなった寒天が見られた。A児は自分の行為によって形が変化した寒天のみを袋に詰めて、外に出て陽の光にかざして見てみる。保育者の膝の上に座り一緒に横になり、陽の光を浴びて変化する寒天の色に笑みがこぼれる。そして立ち上がり、今度は周りの友達の寒天も覗き込んでみる。自分の寒天と友達の寒天を比較しながら、袋を揉んでまた色の変化を確認する。外から戻ってくると袋に詰まった寒天を両手で押したり、揉んでみたり、袋をねじってみたりと自分のものになった寒天との呼びかけ一応答を絶え間なく繰り返していくなかで、「もの」と一体化していくA児が見られた。

「アイスペインティング」

日本語に不慣れなC児にとって、導入の絵本の読み聞かせは、アート活動に入る準備として有用だったとは言いがたい。しかし、大きな白い画面と描画材を手にした途端、それまで周囲のスタッフに意識を向けていたC児の様子が明らかに変わった。従来の言語活動を離れ、アート活動ならではのモノとの関係が始まる。それは対象との対話である。氷絵の具が登場するとC児の動きはより大きくなった。とどまることなく氷が溶けて他の色と交ざり合う光景と共に、C児もまるで氷と一体となって身体そのものが画面に溶け込んでいるような姿があった。手のひらから手首、腕、お腹と画面との接地面がどんどん広がっていき、画面もC児自身も氷と同じ色に変容していく。C児の姿を間近で見ている、その空間を共有している子どもたちも共鳴しだし、氷絵の具での描画活動が一段と大きく激しいものに変化していった。活動中、保育者が常にC児の近くにいたのは、日常生活のなかで何らかの配慮が必要であったからだろう。しかし、その心配はよい意味で裏切られた。

活動直後にたまたま来園したC児の保護者は、保育者から簡単に説明を受け我が子の行為の軌跡を目にしたとき、「私の子がこれを!？」というジェスチャーで驚きと嬉しさが混じった反応を見せていた。保育者も少し興奮気味にC児の活動を伝えていた。その様子は、C児がこれまでとは異なる積極的な一面を発揮してアート活動に参加したことにより、豊かな学びのコミュニティが展開したことの喜びを共有する機会となっていた。アート活動の場には正解・不正解という括りはない。重要なのは、個々が目の前にあるモノに働きかけ、対話し、協同して新たなもの・新たな世界へとつくり変えていこうとする探索活動の姿と、そこから新たな意味や価値がつくり出されることである。

「くねくね粘土」

子どもははじめ物質としての粘土の感触を味わい、粘土の触感や重さ、様々な形などを通して原初的な感情や思考の種が現れる。それは言葉になる以前の曖昧なイメージである。さらに周囲の人の動きや言葉に呼応して、粘土もイメージも変容していく。次第に粘土は「レース場」「湖」「ジェットコースター」という言葉で名付けられる。粘土という物質は変わっていない。変わったのは子どもの思考である。おそらくその

段階で、粘土は子どもにとってただの物質ではない。例えばレース場におけるスピード感のようなイメージが付与され、粘土いうモノは「もの」(世界)となる。物質であるモノから「もの」へと変化したプロセスを読み取ることができる。そして、D児は制作中に自分の粘土を離れて見て、他のグループの粘土と比較するなど冷静で客観的な視点ももっていた。ひも粘土をレース場に見立てるという非常に主観的、情動的な側面と、長さを比較するなどの客観的、合理的な理性が共存し、自身の中での振り返りの視点をも、である。

粘土の鑑賞の時間に筆者の「自分の分身で粘土の道の上を歩いてみよう」という声かけに対してD児が「そうじゃない!」と主張したこと(表5波線部分)によって、筆者は「ああそうだったのか」とはじめて子どもの思考を共有することができた。これは筆者の認識と異なる気持ちのあり方に気づかされる体験だった。子どもの世界に浸りきらないとアートの身体/思考の学びを捉えることができないことがわかった。

このような子どもたちの姿から、アート活動に参加することで、目の前のモノと出会い、自身の働きかけによって絶えず変化していくモノをものへと創造(意味や価値を見いだすこと)する子どもは、アートの身体/思考が活性化していると捉えることができるのではないか。(梶原・宮川)

5-2. 保育者の姿

今年で3年目となったBFAプロジェクトにおけるアート活動では、回を重ねるごとに関わる保育者の姿に変化が見られてきた。昨年度までは、活動中に保育者が子どもの様子を見守るといった姿に終止する感があり、目の前のアート活動に対してどのように関わればよいか戸惑う様子があった。今年度は第1回目から、担任保育者が子どもと一緒に活動に参加していた。また、アート活動で制作したものを園行事の飾りつけに活用したり、日常の保育の中の遊びに取り入れたりするなど、様々なアート活動の展開が見られている。

回を追うごとに、担任保育者として子どもと活動を共にする中で、アート活動の経験値が高まってきたのだろう。アート活動に対する感想を保育者に尋ねたところ、「感じたことや気づき、発見を自分の言葉で表現できる。」「アート活動を通して物を色々な角度から見ようになり、色や素材に目が向くようになった。

絵を描くときに配色を気にしたり、混ぜるとどんな色になるのか興味を持ったりと探究心も育ってきたと思います。」と、活動の意義をそれぞれに受けとめていることがうかがえた。

保育者が活動に参観者ではなく参加者として入り込み、子どもと同じものに触ってみる、描いたり、つくったりしてみるといったことが、子どもの目線でものごとに関わる機会となり、保育者にとってもアートの身体／思考を発揮する場になっているのかもしれない。アート活動を通して子どもの新たな一面を発見したり、子どもに表現しているものについて解説してもらったりすることで、保育者と子どもの関係性に変化が生まれ、その場がフラットな状況になっているように感じる。

(石原)

5-3. 学生の声

筆者は記録係としてカメラを持ち、子どもたちの活動の中に入っていく機会が多かった。カメラの存在には全く気付かないほど真剣な表情をしている子どもたちや、「みてみてー！」と出会った素材やつくり出したものを見せてくる子どもたちがいる。子どもたちが活動の中で見つけた感動に夢中になって向き合ったり、その感動を誰かと共有したい！と思ったりする瞬間に立ち会う。その度に、まさかそんなことを思いつくとは！とカメラの先には「意外」と「発見」が映っている。実践前の題材研究の場である試しの活動で、スタッフは「この素材や内容で子どもたちはどのようなことを思いつき、どんな表情をうかべるのだろうか？」と子どもたちの姿に思いを巡らせている。迎えた活動当日の子どもたちは、試しの活動での予想をいつも超えてくる。

例えば「くねくね粘土」では、子どもたちはどのように粘土を細長く伸ばしていくかということを想定していたのだが、粘土を“細長くする”という行為を通して子どもたちの発想はどんどん膨らんでいったということがあった。「一番細くする」ことを目指して、見えないくらい小さな粘土の団子を指の先に乗せてカメラに見せてきた子どもがいた。大人の目に留めなかったところで、子どもの探索活動が起きた瞬間だった。また「ぷるぷるゼリー」では、寒天との出会いに子どもたちは大喜びするだろう、と笑顔いっぱいの子どもの姿を想像しているが、記録を見返すと泣いていて

なかなか活動に参加できない子どもがいたことに気づいた。喜びだけではない物語も活動の中で起きるということを感じた瞬間だった。

意外なところで楽しんでいた、意外なところで消極的な子どもがいた、といった「想定外」の瞬間に刺激を受ける。そういった瞬間が詰まった写真や、スタッフが関わった子どもたちの様子を基に活動の振り返りが行われ、そこでの気づきが次の活動を作っていくというサイクルが本プロジェクトにある。スタッフの想像を超えてくる子どもたちの想像／創造によって、本プロジェクトは豊かな瞬間がたくさん詰まっているのだと感じている。

(狩野)

幼児が本プロジェクトを通して何を学ぶのか、この活動がどのように子どもたちの日常生活に還元されていくのかなどに興味を持ち、本プロジェクトに携わることにした。本プロジェクトでは、日常で目にするものからあまり目にしないようなものまで、あらゆる素材・材料を使い、子どもたちがそれらを通して多くの感覚を働かせながらアート活動を行っている。そこから生まれる子どもたちの言葉や行動は、私には思いつかないようなものばかりで、活動の度に驚かされると同時に感心させられる。子どもたちは、本プロジェクトを通して心身ともに解放されながら、思いきり自由に自分のやりたいことを満足するまでやり続けているように見える。寒天、アイスペインティング、不織布、新聞紙、粘土など、本プロジェクトで様々な素材・材料に触れ、五感を通してそれらを味わう様子が見られた。子どもたちは、活動の中で、自分が働きかけることで場やものに変化が起きることを純粋に楽しんでいるようにも見られた。

本プロジェクトを通して、子どもたちのこのような体験が幼児期のみならず就学後も継続して行われることが重要なのではないかと感じた。本プロジェクトを通して、子どもたちは自己を表現することの楽しさ、面白さを学んでいると考える。活動の始めは縮こまっていた子も、活動が進むにつれ表情も柔らかく、熱中して活動に取り組む姿を多く見る。子どもたちがより自由な心持ちで、様々なものと触れ合いながら自己を出していける、またそれらを受けいれてもらえるといった体験は、子どもたちのこれからの人生においてとても価値ある大きなものだと考えた。と同時に、子

どもたちのこのような充実した体験のために、私自身に何ができるのかを考え、子どもたちとの関わりを大切にしていきたいと考えた。(学部4年：長倉)

6. まとめと今後の課題

本プロジェクトにおけるアートの活動は、子どもが多様な素材(もの)に触れ、主体的=からだまるごと対象に働きかけ、探索活動を展開することを保障してきた。本稿では抽出した3つの実践から3名の子どもの姿に注目し、子どもが素材(もの)と出会い、関わり続ける場を共有し、共鳴し合うことを通して、アートの身体/思考が促進されていることを論じてきた。本プロジェクトでは毎月実践を重ね、プロジェクトを推進するスタッフを中心に、その活動内容やその意義を可視化する努力が続けられ、園内外に発信、共有しつつある。特に今年度から保護者にも配布している報告書は、各家庭においてアート活動が話題にあがる契機となっていることが、保育者への聞き取りで明らかになっている。

また、学生にとって幼児教育の現場に関わることは、新鮮な経験になっていることは言うまでもなく、子どもたちにとって、友達(横の繋がり)でもなく先生(縦の繋がり)でもない学生スタッフと共に活動することは、斜めの関係性の中でこれまでとは異なる自分を発揮できる可能性と捉えることができるだろう。ここにも本プロジェクトの特徴が見いだせる。

今後の課題としては、実践前に活動のねらいや意義

を関係者と十分に共有することや、ビデオカンファレンスなどの振り返りの場に保育者や学生スタッフも参加するなど、本プロジェクトに関わる者同士、皆で子どもの豊かさの共通理解を図ることである。

さらにドキュメント・ウォールや作品の展示、報告書の配布に加え、親子ワークショップが園においても年間行事の一つとなったことで、保護者にも園でのアート活動が周知されつつある。この点においてはこれまでの課題をクリアすることができていると言える。また、親子ワークショップ当日の様子や保護者向けアンケートの記述からも、概ね肯定的に期待を寄せてアート活動を歓迎している様子が受けとめられた。一方、我々が重視している子どものアートの思考/身体の豊かさという次元においてアート活動の価値が十分に保護者と共有できているとは言い難い。保護者にとってアート活動そのものが自分ごととなったとき、地域とのつながりがより確かなものになっていくのではないかと考える。そして、園外に向けても報告書のように子どもたちの学びを可視化した媒体を制作、広報することを通して、まずは高崎市内の近隣の園でもアート活動の場を広げることが本プロジェクトの次の目標である。(宮川)

註

- 1) 佐伯胖『幼児教育へのいざない』東京大学出版会, 2016
- 2) 子どもと保育総合研究所編『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013
- 3) 小松佳代子『美術教育の可能性 作品制作と芸術的省察』勁草書房, 2018

(みやかわ さおり・ぐんじ あきこ・いしはら かなこ・かじわら ちえ・かのう みく)